

「日常生活を潰され 殺されていった戦争の怖さ」

勝田 民子 （88歳）

戦前私の実家は旗屋を営んでいて、大阪市北区中崎町に住んでいました。戦火の激しさが予感された1944年に、母親の里であった東大阪石切へ縁故疎開をしました。従妹の家に住み、井戸から水を汲み上げるなどの力仕事に頑張りながら暮らしていました。東大阪石切でアメリカ軍のB29の爆撃に遭遇しました。パイロットの顔が見えるほどの低空飛行でした。1945年3月13日終戦の年に予定されていた、東大阪石切の国民学校の卒業式は延期されて、家が焼け出された方々の避難所になりました。

大阪市内では大規模な空襲があり、国鉄環状線の内側は焼け野原になってしまいました。また、淀川に架けられていた長柄橋に向かって避難した方々が、一家全員亡くなっているところもありました。姉は学徒動員され、軍需工場で働いていて、パラシュートなどを作っていました。姉の友人も空襲で亡くなりました。私は、男の子3人、女の子5人の8人兄弟の末っ子でした。長男と三男と長女は病死をしました。次男は兵士としてニューギニア戦線に派遣されていました。

戦争が終わり、東大阪石切から帰った私は、逃げ回らなくても良いと思うと、本当にほっとしました。しかし、戦後の生活は苦境のどん底を極め、母がセルの

着物と、お米などを物々交換で手に入れていました。食糧の買い出しは父と私で、伊勢にまで出向いていました。

終戦後、女学校の授業で校長先生が「今度の戦争がいかに無謀であったか、先生は深く反省しています。新しい憲法では戦争をしません。」と自戒を込めてお話をされました。クラスでは、父親や母親が亡くなった子どももいて泣いていました。その姿に、私たちはもらい泣きをしました。次兄が戦後1年程してニューギニアから帰ってきました。父は兄の顔を見て安心したのでしょうか、63歳で亡くなりました。その父は、生前ほとんど戦争の話はしませんでした。子どもたちに言えないくらい、よほど辛いことだったのだろうと、推察しています。私は改めて、絶対に戦争をしてはいけないと思います。両親を失って戦争孤児になった子どもたちのことを思い、また防空壕の中で亡くなった人たちのことを思い、そして日常の生活が潰されていった怖さを思い出します。

今、日本の社会をみていると、戦争が一瞬にして現れるのではないか。そういう不安を覚えます。平和憲法を守る運動を、しっかり行いたいと考えています。